

ラブソング

-愛のうた-

Piece of Heaven 番外編



著： 蒼 月

思い思いに酒や料理を片手に雑談に花を咲かす。徹と玲が居なくなって、帰ってきた日。退院祝いをするからと大崎の豪邸に招かれた。

二度目の訪問になるこの家の大きさにまだ慣れなくて、それでも馴染みの人間が作る空気にすぐに慣れた。彼らの仕事の話は甲斐たちには浮き立つような話も多かった。

特にロスに長く居たレンの話は面白い。驚くのは名前しか知らない、と言おうか名前だけは有名で知っているミュージシャンたちと一緒に仕事をしていたりして、その辺の話が聞けたりすること。雲の上のミュージシャンの話は面白いが、その人間と仕事仲間だと思えば普段ふざけてばかり居るレンが凄い人なのだと改めて思ってしまう。

もっと面白いのは今まで聞くことがなかった、ショウ達メンバー同士の人間関係だった。ギタリスト二人、トシヤはショウと高校の同級生で、キーボードのダイとはトシヤがバイト先で知り合ったらしい。その当時ショウはすでにBlackRockのメンバーで活動していた。もちろんレンとは大崎の繋がりを知り合ったのだ。ショウは小学生のレンを知っているという。

ドラムのセイヤは一人だけオーディションで決めたメンバーらしい。もともと学生時代の仲間の初代ドラマーは家庭の事情でプロの活動は出来なかったそうだ。そんな仲間内の繋がりもみんなの会話の中で知った。

今まで知らなかったこと。とても不思議な気持ちで知った。

以前甲斐たちが尋ねてきた大崎の家。そのリビングと言おうか、ホール。以前は夜遅かったし、手前のテーブルで話ただけだった。しかし部屋の奥にはグランドピアノまである空間だったのだ。昔は海外からの客までもてなしたというのだから、上流の家というのはこんなものなのかも知れないが。

どこにあるのか、流れている音楽はたぶんどこかにかなりいい音楽機器があるのだと思うが、その音がやむとショウがピアノを弾きはじめた。

ギターを弾くショウはカッコイイが、ピアノの前に座るとどこかの貴公子みたいだった。見た目言えば、ショウにはギターよりもピアノの方が似合うかも知れない。少し明るいブラウンの髪は、染めているのではなく自前らしい。長い髪は華奢な体の線と併せて、その高い身長でなければ女性に見えるかも知れなかった。

その曲は『ノクターン（夜想曲）』と言うのだと、瑞紀が耳打ちしてきた。瑞紀はどうしてそう言うことを知っているのか。時々不思議になるのだが、一緒に育って、今だって殆ど一緒の生活なのに驚くくらい甲斐の知らないことを瑞紀は知っていた。

一曲弾き終わってショウは今度ギターを弾き出した。それに気付いたダイがピアノの前に座る。古い音楽のナンバーはオールディーズだったか、映画の主題歌だったか。あまりに昔の音楽で、聞いたことはあってもタイトルもなにも甲斐たちにはわからない。そのままジャズのスローナンバーになり、二人は思いつくままにどちらかがリードして次々に弾いてゆく。

ライブでもそうだった。

客席からのリクエストに、徹が曲の確認を取ると誰かが弾きだして、その音がそろい出すとシ

ョウがリードを取ってあっという間にメロディーを刻む。徹と玲がどんな歌詞でも覚えていることにも驚いたが、ショウ達が何年前にやったか知れないナンバーを正確に刻むことの方が驚きだった。

演奏も歌も、踊りも。別にちゃんとした舞台があるわけではない。鼻歌を歌うように、単に身体が動いてしまうように、ただ思いのままにしているだけ。だがそのことに感動してしまうほど、ここにいる人間には音楽が染みついている。

「いつもこうやってきたのかな」

甲斐は言った。

自分たちが彼らとつきあい始めたのは三年ほど前だ。ずっと昔から彼らはこうやって体の中に音楽を抱いて過ごしてきたんだろう。

いつか聞いた、

『舞台も、照明も、音響だってなくても歌える。どこでだって好きな歌は歌える』

そう言ったという徹の言葉を思い出す。必要なのは仲間と過ごす、こういう時間なのかも知れない。

「初めて見た」

そう言った瑞紀の視線の先には穏やかに見つめ合い微笑みあう徹と玲の横顔。確かにこういう二人を見るのは初めてだった。

聞こえていたのがどこかで聞いたダンスナンバー、そう気付いたときピアノの前で徹が玲の腕を引いて踊り始めた。ダンスはミディアムスローな曲から、ステップを刻むものへ。そしてまたスタンダードなスローバラード。弾いているのは大崎だった。

弾いている方も踊る二人も息はぴったり。なにも言わなくても互いの呼吸でわかるのだろう。そこには音楽だけがあった。

珍しくハミングするように歌うショウの声は澄んで綺麗だった。ピアノの音に合わせて呟くように大崎が歌うバラードはずいぶん昔、流行ったポップス。

「俺いま、凄いもの見てる気がする」瑞紀が呟いた。

音楽を愛するものには、音さえあればいいのだろう。自分の歌い出す声とリズムを刻む身体と。それさえあればどんな立派な楽器も舞台もいらぬ。

なにもなくても歌うことは出来る。踊ることもできる。そして音楽があれば何もいらぬのだろう。

瑞紀と甲斐と慶はまだそこまで音楽を突き詰めたことはなかった。ただ何となく三人でやってきた。自分たちがいつまでもアイドルから抜け出せないのはそう言う心構えの問題なのかも知れない。やはりぬるま湯かな、と思う。自分たちが居る場所は。

ここで今見ている風景はとても平和で幸せに満ちたものに見える。けれどここまで彼らが辿ってきた道は、笑うよりも悔しいことの方が多かったに違いない。それでも彼らはこうやって笑い歌っている。届きそうで届かなかった玲たちの『真実』が少しだけわかったような気がする。

おいでおいで、と手招きされて徹の作る酒を飲んだ。男として理想だと思う。けれどそんな徹

でさえ、仕事も恋も結婚も思うようにはならないらしい。

仕事のことはまだまだわからない。恋だってまだ死ぬほどの想いをしたわけじゃない。徹はこの年齢ですでに玲という女の子に出会って、仕事と恋の選択を迫られていた。

自分だったら...甲斐は思う。自分にはまだ手に負えない。きっと徹もそうだったのだろう。それでも選ばなければならなかった。選ばずにいられない状況だった。

そして乗り越えた先に、今の彼らがある。

甲斐の目の前で笑っている徹と玲が居る。ただ甲斐はまだこのとき知らずにいた。

まる一日居なかった徹と玲がどんな話をしたか。二人がどんな未来を選んだか。そして甲斐自身、そう遠くないうちに選択を迫られることになることを。どんなに苦しくとも自分自身から逃げることは出来ない。

徹がピアノを弾いていた。玲がその足下に座っていた。膝を抱えて.....蹲るようにしながら膝に頬をのせている。その頭上で徹の指が軽やかに動いた。

相変わらず甲斐の知識では曲名までわからない。でも知っている曲だった。

ここに居る誰もが気付いていた。この曲は徹が玲の為だけに弾いているのだと。

仲間に見守れれながら、けれど彼らは二人だけの世界にいるのだ。一枚の絵だと思えば、それはひどく幸せそうなシーンに違いない。

事実、玲はずっと悩んで苦しんでいたときとは違い幸せそうな微笑みだった。この先になにがあるとも『決めて』しまった二人にはもう嵐も過ぎ去った後なのかも知れない。

甲斐たちにとっても徹からすべてを訊いてしまったあとでは、複雑な想いで見つめるしかなかった。

彼らの微笑みも哀しみも、他人が推し量ることは出来ない。そして宴の終わりは確実に近づいていた。

ホールの真ん中。大きな窓の外には月が覗いていた。ここが都会の真ん中だと言うことを忘れそうな空間。ピアノの前の二人を囲むように、二人を暖かく見つめるいくつもの瞳。

そしてその中でまるで時が止まったように、他の存在を忘れたように在る二つの姿は一枚の『絵』のように見えた。そして二人の為だけに音は流れていた。

今日が終わり、新しい日が来る。何が在ろうと踏み出さなければならない二人が最後に残したものは、限りなく優しく哀しい歌だった。